明治のはじめの上流階級の人々の間では、ヨーロッパの文明にあこがれをもつ気分が強くあふれていました。リンはそれらの人々とつきあっていくうちに、ヨーロッパ文明をささえているキリスト教に強い関心をもつようになりました。

そのころの日本の社会では、男子が中心で女子の地位は低くおさえられていたのですが、キリスト教では、男女はもちろん、すべての人は平等であると教えています。リンは勉強したくても、女子であるために勉強できなかった自分の少女時代を思い出しました。

「そうだ。これからの世の中は男女を問わず、小さい子どものころから、しっかりと勉強する人を育てなければならない。教育がこの世の中を進歩させていくのだ。」

リンは、だんだんと社会問題、特に婦人運動を通して、女性の社会的地位を高めていく運動に参加するようになりました。